

『経済学の冒険』は〈学問の扉〉を開けることができるか  
—— 経済学をめぐる多様な問題群を鳥瞰する ——

山根 聡之  
塚本 恭章

当該論説は、同紀要において同じく「論説」として寄稿・掲載されている栗田健一氏と塚本恭章氏との「共著」の第二弾に相当するものです。すなわち、塚本恭章著『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』（読書人、二〇二三年九月五日、六五六頁）に対する山根聡之氏の「書評」と著者である塚本恭章氏の「リプライ」をあわせたものです。一から四までが山根、五が塚本の執筆パートとなります。

〈目次構成〉

- 一. はじめに
- 二. 本書の目次と、独創的なプロローグの「工夫」と「冒険」

三、経済学の方法態度——素読と祖述——

四、おわりに

五、『経済学の冒険』の山根書評への塚本リプライ

## 一、はじめに

塚本恭章著『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド100』は国内外を問わず、同時代の経済学と経済学者たちが世に問うてきた作品を、一〇〇の書評という形で一五年もの長きにわたって書物や作者と対話を重ねてきた経済学レビューをまとめ上げた、すぐれた労作である。上下二段組みもふくんで実に六五五ページもの大著であり、一人の研究者が単独で著した書物であるとはにわかに信じられないほどに膨大である。塚本氏が本書完成までに要し、経済学書をひとつでも多く読者に紹介し、経済学読者を増やすことに情熱を傾け続けた不断の努力と、同時代の経済学ならびに経済学史の世界に果たした功労の大きさに、まずは心から敬意を表したい。

その上で、これから本書を手取る読者、あるいはすでに読み進めている読者に向けて、本書がもつ書評本としてのユニークな点と、塚本氏の書評スタイルについて紹介したい。さらには塚本氏が見据えた、同時代の経済学ならびに経済学史とその研究者を取り巻く定点観測の価値などについても意味づけながら考えてみたい。

『経済学の冒険』は〈学問の扉〉を開けることができるか

## 二、本書の目次と、独創的なプロローグの「工夫」と「冒険」

本書の目次をごくごく簡単に示せば、次のとおりである。

プロローグ ブックレビューと経済学の冒険

第一章 市場と貨幣——経済学の大地に触れる

二分法的な思考様式を超えて、〈市場〉と〈貨幣〉の在り方をどう理解すればよいか

第二章 資本主義と社会主義——対立する世界のゆくえ

二〇世紀の資本主義と社会主義をめぐる〈知的格闘史〉を、今あらためて照らし出す

第三章 経済思想と経済学説——競争性と多様性のはざま

経済学という学問が真の危機に直面するなか、〈経済学史〉を学びなおす意義とは何か

第四章 人間社会と自伝・評伝——勉強と読書のきっかけを掴む

ときには教科書から離れ、経済学者の肉声から〈人間社会〉の現状と未来を考え直す

第五章 経済学の冒険は延長戦へ——ブックガイド四〇のタイプブレイク

経済学の古典から現代の名著までカバーする、〈バリエーション〉に富む四〇冊ガイド

補 章 時代を彩る書物たち——年末回顧号「経済学」(二〇一六〜二〇二二)

新自由主義と資本主義のゆくえ、これからの〈経済学の使命〉はどう展望できるか

特別編 経済学はなにをどのよう探究する学問か

著者の〈思考〉を追体験する知的冒険の世界

エピソード 経済学の次なる冒険をめざして

『経済学の冒険』へのリアクション

年表、人物ガイド、人物ガイド作成文献一覧、初出一覧、署名索引、著者名索引

この目次に表れているように、その圧倒的な分量に反して、読者が興味のあるジャンルから好きにどこから読んでもよい構成になっている。未読の読者や経済学にあまり親しみのない読者も、まずはこの目次を手がかりに、本の分厚さを恐れず手に取って読んでほしい。

ただしこれから本書を読み始め、時間に少しゆとりがある読者、そして塚本氏の思考と知的格闘の軌跡を追いかけてほしい読者に対して、私はまずは「プロローグブックレビューと経済学の冒険」を丁寧に読むことからおすすめしたい。なぜならプロローグにこそ、読者へのメッセージがはっきりと表されているからであり、塚本氏がタイトルに込めた「経済学の冒険」の意味が最も明確に示されていると信じるからだ。

塚本氏はプロローグにおいて、「ブックレビュー&ガイド100」を配置するにあたって、読者に対して本書の「ブックガイド」を、つまり本書を読む上での道案内を丁寧にわかりやすく示すところから始める。先に示した目次とは異なる配列ではあるが、著者自らによる行き届いた交通整理であり、すぐれた発明である。本の序章部分において読み方をガイドする本は数々あれど、こうした構成はきわめて独創的な心配りであり、また書評集としての本書の価値をより高めている。この「工夫」に従えば、読者のための本書の構成は次のとおりとなる（以下、一八頁〜二三頁）。

① 計一〇〇冊の紹介（ブックレビュー六〇冊とブックガイド四〇冊）

- ② ブックレビューに登場する経済学者の人物ガイド
- ③ 経済学の「年末回顧号」と各章末尾の「間奏曲」
- ④ ブックレビューした著者からのフィードバック
- ⑤ 書評論文、対談や最終講義をふくむ「特別編」

本書にはこうした五つの「読みやすくするための工夫」(一八頁)が綿密に施されている。なればこそ一見雑多で、ともすればあまりの情報量に圧倒されそうになる書評群を、読者は主体的に、つまり自分のその時々を持っている興味関心に従って自分事として読み進むことができる。いや、そればかりではない。この工夫によって、塚本氏一五年分の書評の積み重ねを再構成するとともに、凡百の「ブックレビュー集をこえる特徴」(一八頁)を獲得させることにも成功している。

さて、本書のタイトル『経済学の冒険』に込められている「経済学の冒険」とは何を指しているのか。塚本氏は「知的関心ないし知的好奇心」にもとづいて「学問の扉を開ける」(二二頁)こと、「本」をめぐる旅、「人」をめぐる旅」と表現しており、さらに読書を通じての「営みがいずれ各々の皆さんに独自の思考と思索の「旅」になる」(二三頁)と読み手にエールを送っているが、本書を通じて経済学ないし経済学史に触れ、楽しみ、知的格闘の世界にいざなわれることこそが「冒険」に他ならない。本書を介して読者は経済学のおもしろさ、精緻さ、学説史上の積み重ね、経済学の成果と失敗などに触れるとともに「経済学史の知的な冒険、あるいは経済学史家としての知的格闘」を追体験していく。

このことが、まさに読書を「冒険」たらしめている。つまり本書を読むことだけでなく、本書を通じて経済学の古典や同時代の本、つまり経済学という学問分野がこの世に生み出してきた知的遺産をひとつひとつ読ん

で触れることも意味している。要するに「経済学の冒険」とは、①書評の対象となった作品、②塚本氏の書評、③書評を読み、書評を通じて作品に触れた読者の知的な営為——こうした三者の知的格闘の往復運動であり、ここで行われる「冒険」は幾重もの入れ子構造をとっていると言える。加えて塚本氏がブックレビューをおこなった著者本人からのフィードバックという豪華なプレゼントがあり、またこれに対しての塚本氏のリプライがあり、それらのやりとりすべてを読者は本書で味わえる。

かくて幾重にもなる書き手と読者とのコラボレーションによる「経済学の冒険」は続いていく。なんと豊かな読書体験であろうか。本書の最も大きな価値はここにある。

### 三. 経済学の方法態度——素読と祖述——

「経済学説史家は古典に対する分析とその再構成とにあたって、祖述と批判とを同時に行なう」<sup>①</sup>。

戦後日本を代表する経済学史家・小林昇の言葉である。専門研究書に対する紹介・書評をまとめた経済学史家による書評本はいくつかある。しかし専門家のみならず、一般読者や学生向けに書かれ、古典のみならず時代のさまざまな経済学の著作を扱った経済学の書評本は、私が知る限り本書『経済学の冒険』のほかにはほとんど類を見ないように思われる。

塚本氏のこうしたユニークな書評スタイルを考えるにあたって、対象とする本や作者に対しては、二つの接近法がある。漢籍の読書法を借りれば、ひとつは「素読」。つまり時に音読を行い暗唱できるほどの水準まで、書かれた文章をとにかくありのままにしっかりと読むことである。もうひとつは小林昇も言う「祖述」。先人の理論や学説を読んで理解し受け継ぎながら、場合によっては学問を発展させていくことも念頭に置きながら、

自分の言葉で書くことである。世の多くの書評はこの二つの接近法で形成されることが少なくないが、塚本氏の書評スタイルは世に出された本の内容を丁寧に読み、まずもって読者を対象とする本の世界に連れていき、これを素読・祖述する姿勢が一貫している。

塚本氏自身は「世の中でいかなる評価を受けるかどうかは「その次」なる問題」「本書で選書され、ブックレビュー（書評）された書物たちは、わたくし自身が「読み継がれてほしい」と深く願う書物たち」（一七頁）という。さらに「その時代に十分な評価を受けずにいた本が、のちになってあらためて復活し再評価されることだってある」（一八頁）とまで言い切る。これは評者自身の自戒を込めて述べるが、作品や著者を安易に批判し、時に自己を正当化しようとする誘惑からあえて距離を置き、禁欲して書評するという方法態度を自らに課しているからに他ならない。そこには塚本氏自身の経済学についての向き合い方、さらには「経済学」学を取り扱う経済学家としての矜持、言い換えればありたい知的な姿勢が深くかかわっていると思われる。

経済学のみならず、社会科学は古くは「理論・政策・歴史」という三つの分野からそれぞれの学問分野を成立させてきた。ひとくちに経済学といっても、経済理論（ミクロ、マクロ、古典派、マルクス派、現代マルクス派、ポストケインズ派、制度学派など）、国際経済学、開発経済学、統計学、計量経済学、福祉政策、農業政策、財政政策、雇用政策・分配政策・安定成長政策、環境政策、日本経済史、西洋経済史、各国経済史など、実に様々な分野が組み合わさって形作られている。そして経済学史研究者は時に（理想を言えば）経済理論・経済政策・経済史という三分野、あるいは経済学それぞれの各論を包括して理解し研究に当たることが求められる。

しかし言うは易く行うは難し。専門化・細分化が進み、発展著しい経済学に対して、TPO（時代と場所と場合）の範囲を広げてアプローチし続けることは簡単なことではない。（この論説の読者として想定されてい

る、経済学部の学生さんは身に染みて実感するかと思われるが——)とりわけ経済学は分野ごとの先鋭化が著しい。そのため経済学全体をトータルにとらえることは難しく、残念ながら学問のたこつぼ化、要するに学問文化の孤立化と相互無関心は、ある意味において必然にならざるをえない。

本書は、こうした経済学を取り巻く閉塞した学問状況にも一石を投じるものである。国内外を問わず、市場と貨幣(第一章)、資本主義と社会主義(第二章)、経済思想と経済学説(第三章)、人間社会論と自伝・評伝(第四章)、同時代の推奨策(第五章)など——こうした多種多様にわたる経済書たちを、まずは同時代人として経済学史家として通読し、私たちにいち早く紹介し、経済学上に位置づけてくれる仕事は、ほとんどなかったと言ってよい。これは塚本氏が、社会主義経済計算論争から現代オーストリア学派による経済計算論争といった論争史を主たる研究領域として出発し評価されてきたことと無縁ではないと思われる。様々な著作を通じて資本主義分析と批判、経済学分析と批判を織り込んだ本書は、ある意味において読者の興味関心の幅の広さと深さを問うてもいる本であることも付け加えておきたい。

#### 四. おわりに

もとよりこの短文では、本書の魅力や価値をすべて紹介できるものではない。だが幸いにも、本書については、先で触れたブックレビューした著者からのフィードバックはもちろんのこと、週刊読書人のレビューや対談、出版後の著者自らによるアマゾンレビュー、そして複数の書評が既にいくつも世に出されている。とりわけ経済学教育の視点から評されたものとしては、田添篤史氏(三重短期大学教授)による「経済学史の教育」<sup>(2)</sup>の見地からのすぐれた書評論説などが出てきている。もし私もそうしたレビューたちの末席に加わることが



できるとすれば、これに勝る光栄はない。

最後に、本書のさらなる価値について付け加えておきたい。経済学史研究者として大学で経済学教育にかかわっている者の一人として、私がとりわけ感銘を受けたのは、本書の補章「時代を彩る書物たち——年末回顧号「経済学」(二〇一六～二〇二二)」である。なぜなら、七年分の経済学上の注目すべき問題関心が、かなり共通した形で整理されているという意味で、この補章には他の章よりも色濃く塚本氏の思いがあらわされているからである。

同時代の経済学論壇を見つめ続けることは、すぐれた経済学史家といえども簡単なことではない。もとより各節の年末回顧は著作として整理される前からの労作であるが、こうした日本は言うに及ばず、世界の経済学界を視野に収めた定点観測は、観測者自身に経済学についてのトータルな知見と知的関心、豊かな経済学的教養が備わっていないなければならないことなく、まさに経済学史家・塚本氏の面目躍如といつてよい。読書を進めると、書物と書物、書き手と書き手、時代の中での作品の位置づけなどが気になってくるものだが、七年間をさかのぼって、どんな経済学上の業績が注目を浴び評価されたのか、そしてこの七年間でどう変化・発展したのかなどについて、当時の塚本氏の目線を通じて「経済学の業界地図」のような形で生き生きと再現される様子は、経済学の歩みとつながりをまざまざと見せられるようである。本書で紹介されている古典はもとより、いまや現代の古典的名著となった書物たちが読みたくなる。

塚本氏はこの本でとりあげられている経済書の著者たちと、インタビュアーや書簡の形で「対話」を続け、意見交換という往復運動を精力的に続けている。本書の魅力を絶えず発信し、アップデートし続けていることも注目に値する。また冷静に作品を紹介し評価しつつ、著者を「先生」と呼び表して、同時代を生き抜いてきた偉大な先達に尊敬の念を表しながらも、時に経済学のひとりのファン・一人の学生に戻るかのような塚本氏の

姿が垣間見えるところも楽しい。

何しろ相手は綺羅星のごときスターたちである。伊藤誠、西部忠、そして岩井克人といった塚本氏が直接師事し尊敬してやまない巨人、本書にリアクションを寄せている塩沢由典、平井俊顕、根井雅弘といった泰斗、帯文のみならず本書出版後にあらためて論説を発表した吉川洋、塚本氏と対談をおこなっている水野和夫——いずれも日本の経済学界の花形役者ばかりである。彼らとの対話の積み重ねも他に類を見ない本書の希少性だが、対話のラリーが着実に続いていることは、著作や著者と塚本氏とのコラボレーションがこれからも終わらないことを明示しているようで勇気づけられる思いがする。

知性は教育によって支えされる。経済学もまた然りである。「経済学をなぜ学ぶのか」、本書は経済学と経済学史の魅力を読書と書評という形で伝えてくれる。『経済学の冒険』は、経済学教育に勇気と希望を与えてくれる作品である。これから経済学を学び始める人だけでなく、現在学んでいる人、学び直す人もぜひ手に取って、この書評の名著を折にふれて読んでほしい。

## 五. 『経済学の冒険』の山根書評への塚本リプライ

以下では、栗田健一さんのケースと同様に、山根聡之さん（関東学園大学教員）の書評へのリプライを書き、山根書評と塚本リプライの「共著論説」の形式としたい。著者のリプライが加わることで、書評単体の場合よりも議論の中身が深まり、新たな結合力が発揮できれば幸いである。

\*

山根さんの書評は、主に拙著『経済学の冒険』をどう読むかという立場から、書評集としての本書の特徴や

論述スタイルの工夫などについて、行き届いた紹介がなされている。率直に言えば、著者としては山根書評を読んでいる、いくぶん恐縮するほどの「褒めぶり」である。逆にいえば、批判や批評、主要論点・テーマをめぐる評者に独自の考察が欠けている。「自分のことについて書かれた文章を読むことは、それが好意的なものであれ批判的なものであれ、心理的な抵抗が伴います」とは、私の「岩井論」原稿に対して岩井克人先生が私信で告げられた文面の内容である（補足しておけば、私の「岩井論」は、岩井先生の著書のほとんどを深く読み込み、私なりに構造的に再構成したものにほかならず、岩井克人氏の研究の全体像を鳥瞰できる仕上がりになっている）。山根書評を読みながら、岩井氏のその当時の心境が私自身、少し理解できた。

山根書評は拙著に対して「あまりに好意的」であるため、誤解を恐れずにいえば、かえって逆効果をもたらしてしまうかもしれない。書評というのは内容面での批評はもちろん、評者による新たな論点や問題提起など、議論を質的に発展させるような論述が求められるであろう。一般紙のように紙幅の制限がある場合を除いて、学会誌や大学の紀要などはそうした論述があつてこそ、書評は双方に効果的な意義をもつからである。そして書評へのこうしたリプライやリアクションを書くことは、じつはなかなかのエネルギーが必要である。いうまでもなくそのエネルギーは、書評の労をとっていただいた評者への感謝の念から湧き起こってくるものだが、著者である私自身のそうしたエネルギーをおのずと「引き出してくれる」ような書評ならば、筆は軽快になり、なによりリプライするという作業そのものも楽しくなる。では、山根書評の場合はどうであろうか。

\*

『経済学の冒険』の目次について、山根氏は「ごくごく簡単ながら示せば」と述べながらも、氏の書評ではかなり詳細に、いやほとんど目次の全体そのものを書評の最初に紹介している。書評の一般的な書きぶりとしてその点にとくに問題はないが、こうして紹介された目次構成をふまえて、『経済学の冒険』においては具体

的にどんな書物がどのように取り上げられているのか、各章の「大きな主題(テーマ)」を掲げたタイトル(たとえば、第一章の「市場と貨幣」、第二章の「資本主義と社会主義」など)とそうした書物たちはどのような学問的な関連をもつといえるのかなど、当該書評では、本書の内容面に即した紹介と評価はほとんどなされていない。先にリプライすることの著者のエネルギーについて言及しておいたが、本書に所収された一〇〇冊超の多様な書物について、評者である山根氏自身はどのような認識をもとに読み解いていったのであろうか。どんな書籍にとりわけ興味関心をもったのであろうか。おそらくは実際に手に取って読んでみた本もあるはずだから、そのことに触れながら、みずからの「読書体験」を語り直してみることも有意義であるにちがいない。「著者の読み方」と「評者の読み方」の違いについての比較考察論などもあれば、さらによいであろう。書評はみずからの学問の理解や思考を映し出す「鏡」なのだから。

したがってこのような論述がなされている「書評」ならば、書評へリプライする著者のエネルギーはぐんと高まり、さらには、著者である私自身があまり自覚的でなかった側面を教示され、新たな知的関心を引きだしてくれたかもしれない。むろんそうした側面が山根書評になかったわけではまったくない。山根さんなりの本書の読み方についての論評はとても貴重であり、本書の挑戦そのものへの高い評価も本当に嬉しいものである。ただ山根さんの書評は、本書をつうじた、あるいは本書における「著者の心情」についてはかなりの分量を割いて扱っているが、「著書の情景」についてはほとんど割愛されてしまっている。そのゆえに結果的ながら、私の目には「評者の顔」がひまひとつ見えにくい書評になっている印象が強く残ることとなった。

たとえば『欲望の資本主義』シリーズや『石井克人「欲望の貨幣論」を語る』など、経済学を大学で学んでいる学生諸君にも興味をもって読んでもらえるような作品を、本書では数多く扱っている。「資本主義」をめぐる論議は今や世界的に大きな関心を喚起しており、斎藤幸平氏の『人新世の「資本論」』(集英社新書、

二〇二〇年）は五〇万部のベストセラーで、その年の本屋大賞の受賞作ともなっている。社会科学としての経済学は「資本主義」経済の自己認識の歩みを理解することから開始したのであり、そうした問題状況は今なお「グローバル資本主義」の是非という形で議論され続けている。二〇一四年のトマ・ピケティ『21世紀の資本』を契機に大きく再燃した格差再拡大や貧困問題、グローバルな地球環境問題を含め、「資本主義しかないのか、それともそれに代替しうる新たなオルタナティブがありうるのか」という論点といってもよい。人類は「社会主義」を本当に過去の遺物とみなしてしまっただろうか。「資本主義」のあり方を再考することはそれを基礎づけている「貨幣」（や「市場」）のあり方をも再考することではないか。これらはまさに二〇世紀から引き継がれた問題群であり、主流派のミクロ・マクロ経済学、計量経済学といった諸科目のみではけっして明確な解答を導きだせないだろう。非主流派や異端派経済学の潜勢力、さらには経済学史や社会思想史のあり方そのものを問い直すことの意義が、あらためてよりいっそう重要になっていくのではないか。

伊藤誠、岩井克人そして西部忠氏らの書物が『経済学の冒険』では複数取り上げられている。彼らが著者である私の学問の師であることがそのことの主因をなしていることはいうまでもないが、それ以上に、彼らは自由放任主義・新自由主義思想を基礎づけている主流派の新古典派経済学とは明確に異なる思考と洞察を堅持・強調してきており、その思考と洞察こそが現代においてより大きな輝きを放っていることへの積極的な評価にほかならない。『経済学の冒険』では、各章の冒頭にリード文を付して私自身の問題関心を簡潔に書き記している。「本書の目次」を紹介するなかでリード文のタイトルについても言及している山根さん自身は、このような主要論点と主要テーマについてどう思考し、考察しているのか、これこそぜひ書いてほしかったし、見解を聞きたかった。このことは、当該書評を読むことを想定して書かれた学生諸君にとっても同様であろう。

山根さんは、第三節「経済学の方法態度——素読と祖述」の後半でこう述べている。「経済学全体をトータ

ルにとらえることは難しく、残念ながら学問のたこつぼ化、要するに学問文化の孤立化と相互無関心は、ある意味で必然にならざるをえない」し、続けて「本書は、こうした経済学を取り巻く閉塞した学問状況にも一石を投じるものである」と。これは、言われ続けて久しい経済学の危機的状況を指摘した重要な意味合いをもつ。しかしながら、すでに少なくない経済学者がこうした危機を打開する試みをなしてきたこともまた事実であろう。そうした既存の試みをどう評価・総括し、それをふまえたうえで、拙著の試みがどこまで成功しているのかをあらためて検証する姿勢こそが「書評」に求められるのではないか。いわば本書を「媒介」として、みずからの経済学観を提示するのである。

\*

ここでは話題を変えて、『経済学の冒険』の作成現場について触れてみることにしたい。私は、『経済学の冒険』を執筆し刊行していくなかで、とりわけ岩井克人先生からじつに大きな励ましとエネルギーを継続的に頂戴してきた。二〇一五年四月末に日本経済新聞出版社から『経済学の宇宙』が刊行され、それに「書評」を書く機会を得たことで、私自身の「経済学」に対する知的関心は大きく拡充することになったといつてよい。ちょうど岩井先生の『経済学の宇宙』が刊行されたばかりの時期の「社会思想史」の講義において、「ほんとに凄い本に出会ってしまったよ」と受講学生にいささか興奮気味に話したことを今でも鮮明に覚えている。

本書「プロローグ」の原稿ファイルをお送りし最初に目を通していただいたのが岩井先生であり（結果的に唯一、岩井先生のみとなった）、帯推薦文の執筆依頼を最初にお願いしたのも岩井先生だった。岩井先生とは学問的に立場の異なる書物が含まれている拙著への推薦文を依頼すること自体、当初の私はかなり慎重でかつ躊躇した。しかしながら私の依頼に対して岩井先生は、「一〇〇冊をこえる本についての書評集は塚本さんの素晴らしい記録です」といわれ、帯推薦文を喜んでお引き受ける旨、メールに記されていた。そのとき私は

初めて「記録」というワードに今まで以上に着眼するようになったのではないかと思う。というのも、上記の『経済学の宇宙』もまた、岩井先生自身の学問をめぐる「記憶」から紡ぎ出された壮大な学問をめぐる「記録」にほかならないからだ。『経済学の宇宙』は、いわゆる標準的な「経済学の歴史」を描き出した作品ではない。しかしながら、それは著者の意図を超えて、経済学史のテキストブックには到底みられない「既存の（主流派の）経済学」との独自の知的「格闘」が、圧倒的なりアリテイと筆力でもって見事に論じ直されている。経済学と法学の理論問題——不均衡動学、シュンペーター経済動学、資本主義・貨幣論、法人・会社論、信任論など——をめぐるひとつひとつの岩井氏みずからの知的「格闘の歴史」が連綿と有機的に繋がり、それらがいわば「宇宙」をなしているのだ。「経済学の歴史」の本ではないにもかかわらず、『経済学の宇宙』は独自の岩井「経済学史」の本として読むことができるわけである。岩井の思考は何を継承し、何と決別するものであるのか、そしてそれはいったい何を目指そうとするものなのか。そうした先人の「思考の集積」を追体験できることは、言語を媒介として想像力を発揮できる人間のきわめて重要な特性機能であろう。

現時点から振り返ってみると、経済学という学問そのものがまさに「格闘」や「論争」の歴史であることに私自身がいつそう自覚的になり、その瞬間瞬間（モーメント）のダイナミックな運動形態をこそ明示しうる書籍を作りたいと切に願ひ、あえて「冒険」と称した書評集を刊行できないだろうかと構想し始めたのかもしれない。あるいは、各時代の躍動性や鼓動、経済学者の息遣いや空気感といったものを、「書物への書評」という形態で「記録」してみたいと思ったのかもしれない。おそらくはどちらもそうなのだろう。経済学という学問が「格闘の歴史」にほかならないことを、みずからの〈経済学批判〉という知的営為をつうじて体系的に論じ直した岩井『経済学の宇宙』は、私にとってきわめて大きな意味をもつ作品となった。四〇代に入っただけの時期に本書に出会ったことも大きかったのではないかと思う。「経済学を学ぶことってやっぱりすこ

く面白いし、楽しい。そして経済学という学問って本当に広大で奥が深い」ということをあらためて気付かせてくれたのだから。

\*

こういう心からの感動と感銘を味わうには、いうまでもなく年季がかかることであろう。ただ、たとえそうであったにせよ、そういう体験を経ないと、そもそも経済学を学んでいるという意識や実感がきわめて乏しくなり、じつにもつたいない。きっかけはスマホでの情報検索であったとしても、実際に書物を手にとってじっくりと思考しながら読み進め、活字の世界に浸る。学生諸君の多くは器用にスマホを使いこなしているようにみえて、実際にアクセスしているのは経済学の書物などとは無関係な全く別のバーチャルな世界なのではないだろうか。書店に足を運ぶことも極端に少なくなってきたようなので、たとえば本屋大賞という賞があることすら知らない学生も多い。そうだからこそ、「活字のある環境」と「そうでない環境」とを明確に区別し、前者をこそ大切にしていくことがよりいっそう大事になってくる。逆にいえば、ここさえ突破できれば、経済学に限らず「学問の世界」の面白さを学生時代のかなり早くに気付くことができるのではないだろうか。山根さんは書評の最後で「知性は教育によって下支えされる」と述べているが、まったくその通りである。著者が勤務する愛知大学はいわゆるブランドスローガンとして、「知を愛し、世界へ」を掲げている。ここでいう「知」とは英語の wisdom のようだ。二〇二四年三月末に刊行された橋本努先生の『人生の地図』のつくり方——悔いなく賢く生きるための38の方法』（筑摩書房）への書評でも書いたように、多様な価値観が混成し衝突しあう現代世界を生き抜くうえで、われわれはこれまで以上に総合的な「知」のあり方というものに直面し続けているのである。

だからこそ、良い本を推奨できる教員の役割もまたいっそう重要になってくるのであり、教員みずからが経



経済学という学問の面白さに絶えず清新な感慨を持ち続けなければならぬ。経済学の「冒険」は、経済学を学び、教えている学生と教員の双方に求められる知的でダイナミックな挑戦的営為にほかならず、したがってまさに、学生と教員の双方によってこそ経済学という〈学問の扉〉を開けることができるのである。拙著『経済学の冒険』がその一助になることを心から願ってやまない。最後になりますが、書評の労をとっていただいた山根聡之さんにお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

注

- (1) 小林昇(一九七二)『経済学史評論』未來社、三一九頁。
- (2) 田添篤史「書評・塚本恭章著『経済学の冒険——ブックレビュー&ガイド二〇〇』」『読書人、二〇一三年』『三重法経』No.156  
<https://miekan.repo.nii.ac.jp/record/2000079/files/%E4%B8%99%E9%87%8D%E6%B3%95%E7%B5%8C%20No.156%E5%8F%87%E7%94%B0%E6%B7%B8%E6%9B%B8%E8%A9%95.pdf>
- (3) 岩井はみずからが著者の一人である『資本主義と倫理——分断社会をこえて』(東洋経済新報社、二〇一九年)のなかで、経済学を勉強して何を一番学んだのかという点について、次のように述べている。「経済学をやるといことは、究極的には、経済学の限界を知って、経済学ではない分野の固有性を理解することではないか。それが私自身、経済学を勉強して逆に得たものです」(一七二頁)。しかしながら、『経済学の宇宙』の第八章などを読むと、岩井は「経済学の限界」とともに、むしろ人文社会科学の独自性の所在を明らかにすることも依然として重要であるとみなしている。自己循環論法の産物である「言語・法・貨幣」論は、まさにそのためにこそある。
- (4) 私自身は、山根書評においても簡潔な紹介があるように、社会主義経済計算論争をテーマに博士学位論文をとりまとめた。栗田書評のリプライでも言及しておいたように、研究当初から西部忠『市場像の系譜学——「経済計算論争」をめぐるヴィジョン』(東洋経済新報社、一九九六年)から大きな知的影響を受けてきた。その西部氏が、本書巻末の「あとがき」で、次のように述べていることはあらためて注目に値する。「本書は、『経済理論と経済学史の研究の相互乗り入れ』、あるいは『諸学派

の理論の混合物」といった印象を読者に与えるかもしれない。だが、わたし自身としては、経済理論の歴史（学説史）というより、経済理論の歴史性に焦点をあてた『経済学批判』の著作として本書を執筆してきた」（二七〇頁）。

(5) 塚本恭章「書評：『人生の地図』をつくる楽しさを知ろう——経営・ビジネス理論の独自の活かし方」、「週刊読書人」二〇二四年五月二四日、第三五四〇号四面。

(6) 山根氏は、拙著の表題である「経済学の冒険」が意味するものについて、次のように解説している。それは、「①書評の対象となった作品、②塚本氏の書評、③書評を読み、書評を通じて作品に触れた読者の知的な営み——こうした三者の知的格闘の往復運動」であると。この三点に異論はない。とはいえ、本稿で繰り返し強調してきたように、経済を説明する経済学という学問そのものが「格闘の歴史」にほかならないのであり、だからこそ経済学は「冒険」たるものを必須としているのである。したがってこの認識こそが山根氏の指摘する先の三点の大前提にあり、岩井先生が書かれた帯推薦文はまさにこの内容を端的に表明するものである。